論文

韓国の正月の祭りに関する省察

――蝟島（ウィド）の場合――

The Reflections on New Year Ritual in the West Coast of Korea : A Case of Wido Island

鈴木　正崇
SUZUKI Masataka

要旨：韓国全羅北道の西海岸に浮かぶ蝟島で正月に行われる村祭りの諸相を考察し、祭りの意味と目的、変化の諸相を明らかにして、海と共に生きてきた人々の考え方を明らかにすると共に、近代化やグローバル化の中で揺れ動く地域社会の変化の諸相について検討した。特に、正月の祭りが無形文化財に指定されたことで、地域の自然や歴史に根差してきた習俗やしきたり、信仰の在り方が、外部からの働きかけに対応して、どのように対抗し、妥協し、再創造や保存を行ってきたかという過程に注目して、現代社会の中での民俗の在り方の再考を試みた。全体の構成は、2012 年 1 月の現状報告と、参与観察、収集資料に基づいて、祭りの全体像を明らかにした上で、無形文化財の指定に至る経緯、指定以後の文化の流用、日程の変更と意味の変質、担い手の巫女の衰退と今後の展望、国家による祭りの管理からグロ－バル化へ向かう動きなどについて考察を加えた。蝟島の村祭りは、緊密に構成されたコスモロジーを維持してきたが、無形文化財や無形文化遺産として外部から評価し直されることにより、伝統と現代が切り結ぶ文化の闘争場として、現代の状況を鮮明に映し出す鏡になってきた。極めて地方的なものが、行政や国家、国際社会の働きかけで揺れ動く現状を通して、近代化やグローバル化と切り結ぶ民俗や伝承の行方を省察する。

▶キーワード　**無形文化財　正月の祭り　コスモロジー　巫女　韓国**

1、はじめに

韓国の西海岸に浮かぶ蝟島（위도、ウィド）の南東部に位置する大里（대리、デリ）[(1)]では毎年の正月３日に、村祭りの巫儀（マウルクッ）を行う。本稿は 2012 年 1 月 25 日（旧暦１月３日）に神奈川大学国際常民文化研究機構の調査団の一人として、この祭りを拝観した時の報告と簡単な考察である。今回は短期の訪問にしか過ぎず、本格的な調査とは言えないが、祭りを通して、漁村の暮らし方、特に海と共に生きる人々の考え方が強く表れていることが印象に残った。また、無形文化財に指定されたことで、地域の自然や歴史に根差していた習俗やしきたりが外部からの働きかけで大きく変化した諸相も明確になった[(2)]。蝟島については既に沢山の報告が書かれているので、重複は逃れないが、変化の諸相を強く意識して、蝟島では外部からの働きかけに対して、どのように対抗し、妥協し、再創造と保存を行ってきたかという過程に注目して考察し、民俗を研究することの意味についても問いかけてみたい。

２、祭りの開始

大里の正月の祭りは当日の朝、午前８時頃から始まる。祭りの関係者は「伝授館」（1992年完成）に集合して出発の準備をして、８時30分過ぎに、祭官の一行が読祝官（儒教式服をまとう）を先頭に、巫女（ムーダン）、農楽隊（青白の韓服に赤黄の襷、コッカルを被る）が行列を組んで、海岸へと向かう。最初に、村の東の端に行き、山への登り口近くにある積石の前の「小堂」（チャグンダン）と呼ばれる場所で、農楽隊が風物（プンジャン）を奏でる。これを堂山祭（タンサンジェ）といい、大樹と石を祀る。しかし、無形文化財に指定される前の集合場所は、東の堂山であり、大樹の前で風物を奏でて神祭りをしてから海辺の道に降りて、山に登ったのだという。小さい変化かもしれないが、人々の心持には、無形文化財であることを意識した、微妙な違和感が生じてきている。

３、願堂祭（ウォンダンジェ）

雪の降りしきる中をタンジェボン（堂祭峰）へと登る。眼下に強風に波立つ海を望む。村の女性たちはタンジェボンへの山登り（上堂祭）には参加しない。頂上には願堂（ウォンダン）があり、扉を開けて供物を供えて祭場を整える。普段は訪れる人はいない神聖な場所で、一年に一回の祭りの時には周囲に不浄除けの禁縄が張られる。内部には堂神図が掲げられている。『扶安郷土文化誌』（1980）の記録では七位の神像が描かれていたという。現在は、左右の門スヨン大神（武神）、内部にはサンシン（山神）、将軍様、願堂マヌラ[(3)]、本堂マヌラ、オクチ（玉笛）夫人、神霊様の絵をかけ、ムルエギシ（水娘）とエギシ（娘）を祀る。願堂では、最初に読祝官が祝文を読み、その後に、巫女（ムーダン）による願堂祭（원당제、ウォンダンジェ）のクッ（巫儀）が始まる。内容は、ソンジュクッ（成主。土地神）、サンシンクッ（山神）、ソンニムクッ（天然痘。客神）、ジシンクッ（地神）、ソナンクッ（城隍神）、ムンジギクッ（門番神）、最後にキックッ（旗）である。エギシには子供の健康や人々の長寿を祈願し、将軍様には豊漁を祈る。最後に行われるギッ（旗）クッは漁船の船主がベッキ（船旗）を持寄り、ソナン神をムーダンから降ろしてもらって吉凶を占う。旗は船に持ち帰り、神が各漁船を守護する。船主は船旗を持って競争で山から下り、各家でソナン神を祀るベッコサ（船告祀）を行い、豊漁祈願と海上安全を願う。船主の個人の儀礼で、漁民の祭りの特徴であろう。願堂祭は村全体の祭り、「堂祭」であり、西海岸の多くの村では山上の上堂と海岸の下堂の双方で行うことが多いという[(4)]。クッは10時頃から11時30分ごろまで続く。男性が先導する点では儒式の祭式の様相があるが、クッは女性中心の巫儀で、様々な願い事を神々に託して、託宣や指示を得て、正月の年始まりの行事が滞りなく終わる。山上のクッの終了後は休憩となり、火であぶった豚肉を食べ焼酎を飲んでしばし休憩となる。終了後、山を下りるが、ムーダンは山頂直下の岩陰の所で祈願をする。下山に際しては炭で顔を化粧して降りる人もいて、祭りの後の開放感に溢れた道化風のノリの気分が加わる。

４、主山巡り（チュサン トルギ）

海岸の脇に降り、道路を横切って海岸に突出する龍王岩（ヨンワンパウィ）に供物を置いて祀る。米を韓紙にくるんで海に供物として捧げる。これを「東側」[(5)]（トンピョン）

の「龍王祭」（ヨンワンジェ）といい、食事を食べさせる意味だという。村の入口に戻り、村内に通じる石段を登ったところに平地があり、榎の大樹の前に供物を置いて礼拝し、円になって風物を奏する。これを「東側」の「堂山祭」（タンサンジェ）という。雪原を踏みしめて、村落（マウル）を下方に臨む上手に出て、「伝授館」の上に出る。村の周囲を歩いていくのである。周辺を東から北へと巡り、幾つかの特定の場所に供物を置いて拝む。旧大里小学校の敷地で「堂山木」（タンサンナム）跡を拝む。綱引きはこの付近で行った。村の周辺を巡ることを、「主山巡り」や「七山巡り」という。そして、村の居住地の西の端へ出て、チャンスンの所から隣村の「箭幕里」（ジョンマクリ）に入り、集落を抜けて海を望む高台の亭子（あずまや）に出る。ここから読祝官が崖を下って、龍王の岩に供物を捧げて祀る。「西側」の「龍王祭」（ヨンワンジェ）である。村に引き返して、途中で井戸に立ち寄って祀る。村の生活にとって重要な水を供給する井戸は大切な祭場である。ここで村人からの接待を受け、その後に村の正面の海岸部に戻ってくる。

５、龍王祭（ヨンワンジェ）

午後の15時過ぎになると、龍王祭の用意が村前方の海岸で始まる。この場所は、タンジェボン（堂祭峰）の祭場を上堂というのに対して、下堂（アレッタン）ともいって、相互が対になっている。港の中央の海岸に祭壇を設けて、村の女性たちが祭膳を持ち寄る。海で溺れ死んだ死霊のためで、海辺に住む人々にとっては誰か該当者がいるので全員が供物を捧げることになる。「龍王祭が開かれると、主婦が家ごとに膳を持って来て、海辺に並べるが、これは海でおぼれて死んだ祖先のためのものである。伝統的に島と海辺に住む人々はいずれかの世代には水死者がいるはずと考え、彼らのために別の儀礼を行う。水死者のための儀礼を『ユワン祭』という。各家庭の主婦たちは、月末や15日の夜明けに、個別にユワン祭を祀ったり、ムラの共同体儀礼である龍王祭においてユワン祭も一緒に行う。これは、どの地域でも見られる普遍的な慣行である。」［李京燁 2012：98］。特に蝟島では龍王祭に先立って巫女が主宰するユワン祭（水中孤魂祭）を行う慣行であったといい、極めて重視されていた。現在では、ムーダンは15時30分過ぎから「龍王クッ」を開始し、その中にはユワン祭が含まれている。ユワン祭は「水の下の先祖様」の儀礼で、「いつ死んだ何代目の祖父の誰」と名指ししたり、「水死者」「水中孤魂」「無主孤魂」と言われ、集団解冤の対象とされる［李京燁 2012：98］。ユワンバプ（水死者への献食）を撒く時は、金氏、李氏、朴氏、崔氏などと呼びかける。ユワン祭によって水死者を慰めて不幸をなくそうとする想いが、龍王への豊漁祈願と交錯していた。この祭場には住民の全員が参加することになっていて、村の女性たちにとっては、楽しいノリパン（遊び場）でもある。悲しみを楽しみに変える遊びの場でもあった。クッが終了すると、村人、特に女性たちが陽気になってその場で踊る。読祝官が先導し、村の主婦たちは、容器（盥）に入れた「ジュルバプ」（献食飯）を水死者のために海に向かって撒く（トンジギ）。この時には鋤起こし歌やスルベ歌など民謡（カレヂル）を歌う。クッの最後に雑鬼を追い出すノリ（遊び）の雰囲気である。最初は東方の浜辺に沿って堤防まで行き、方角を変えて西に向かって同様のことを繰り返す。ジュルバプを撒く時には、金氏、李氏など姓で呼びかけ具体的な死者を想い浮かべる。そして、海にいる死者たちはいつもお腹を空かしているので、沢山食べ

るようにと言い聞かせて、ジュルバプを撒くのだという。

６、ティベノリ

水死者への散供が終わると、いよいよティベノリ（띠뱃놀이）である。水夫をかたどった藁人形（ホスアビ）と、龍王への供物のフェシクバプ（豆が混ざった御飯）を満載した茅（ティ）の船（ベ）に将軍名を書いた五行の色の旗と船旗を挿して、母船に曳かれて海に浮かべられ、徐々に沖へと向かう[(6)]。多くの女性は海岸にいて、海上を遠ざかっていくティベを見送る。ティベの行方を見届けるために、何艘かの船が出航し、沖へと向かう。岸辺に戻ってくることがないように、十分に沖に出た後に、ティベは母船から切り離される[(7)]。乗船していた女性たちは民謡をうたい風物を奏でて踊りで見送る。クッの最後に雑鬼や雑神を遊びによって送り出す光景を彷彿させる。伴航する船は、最後は名残り惜しそうに、ティベの周囲を巡る。ティベに入れる藁人形の数は本来は五行に充当する五体でなく七体であったといい、かつての主力漁船の乗組員の数と同じで、実際の漁船と同じ状態に見立てている[(8)]。藁人形は海を差配する龍王の神体とする説もあり[(9)]、そうであれば形代（かたしろ）とも言える。藁人形は災厄や不吉なものを追いやる身代わりの贖物であるだけでなく、乗組員の水夫として魚を求めて海に乗り出す姿が投影され、更には元の棲家に戻っていく神霊の姿を想起させる。龍王は、ユアン（水中孤魂）も含めた広義の海の神霊であった。ユアンの祭りはかつては満月の旧 15 日に行った。ティベノリは、村に禍なすものを藁人形に託して放擲するだけでなく、神送りの様相を持ち、豊漁を祈願し、死霊を慰撫する複合的な儀礼である。夕暮れの海の波の間に漂うティベを、名残り惜しげに見送る人々の想いは一様ではない。

７、トッケビ

夜になると、祭官が再びタンジェボンに登って供物を供えて祀る。今回は未見であったが、20 時に祭官と補助の計２名が再び、暗闇の中を山に登って堂飯を納める山神祭を行ったという。この時に、ティベの消えたあたりの水面にトッケビの遊ぶ火（ブル）が見えると、その海面は豊漁だとされた。李京燁が蝟島で聞いた話では「夜になると、船主や船長が山に上がります。上がると、その日の夕方、その茅船の上で妖怪（トッケビ）たちが火をつけて遊んでいるのだよ。それを確認して来て、春に船を用意して、その場所で網を打つと船いっぱいに魚がとれる。妖怪の火があった所に行って、網を売って引っ張ると、魚が非常に多くて、船満杯になるのだよ。だから、茅船を送ってから帰ってくると、船主、船長は、服を一杯着て温かくして、山に行って徹夜をするのさ。そんな由来があるよ。」［李京燁 2012：100］（2011 年 8 月 26 日。李ジョンスン・1935 年生まれ）という。一般にトッケビは龍王の配下にあると考えられていて、妖怪というよりも海の魚の在りかを熟知する神霊のようである。漁民の間に強い信仰が残っている。龍王、ユワン、トッケビは全て両義性を帯びる。ティベには、邪悪なものや災厄を乗せて追いやる機能だけでなく、海に生きる人々の真剣な願いである豊漁の実現が期待されていたのであろう。かつて、ティベノリは旧暦正月 15 日に行われていた。煌々と照る満月の光を浴びて、洋上にトッケビの遊びを幻視する。この切実な想いに、正月の祭りの願いが強く託されていたのである。

８、祭りの意味と目的

大里のマウルクッは、正月という新しい年を迎えて自然と人間との関係の在り方を更新する祭りであった。祭場の移行をみていくと、①村の入口の堂山祭（ジェ）、②山上の願堂祭（ジェ）のクッ、③海岸の東西の龍王祭（ジェ）、④村の入口の堂山祭（ジェ）、④村周辺の主山巡り、⑤海岸部での龍王祭（ジェ）のクッ、⑥海上でのティベ送りの遊び（ノリ）、⑦山上での山神祭（ジェ）、⑧海上のトッケビの遊び（ノリ）、などからなる。ジェ、クッ、ノリが交錯し、厳粛さと遊興が混在して、独自の雰囲気を醸し出す。

祭場は、村→山→村→海→山と移動して、自然と共に生きる村落の秩序を再構築する。海と山、東と西の対立と相補の関係がその中核にあり、村の居住地の内と外の境界地点を経巡る。担い手の主体はクッは女性、海岸での龍王飯は男性、主山巡りは男性、「ジュルバプ」（献食飯）は女性というように、儀礼の担当にも男と女の役割分担があり、対立と相補の関係も見られる。東と西の堂山では榎の樹木を祀り、村の身近な守護神に年頭の祈願をして、魔物（鬼神）が村に入ってこないようにする。東と西の龍王には漁村にとっては生活の糧である海での豊漁と安全を願う。村の南方の周囲を巡る主山めぐりは、風水の影響を残し、村の住宅地の周縁を巡ることで、改めて村の背後から村全体を包み込むような雰囲気が醸成される[(10)]。境界を経巡る主山巡りは、中心と周縁、あるいは内と外の関係性を顕在化させて村の領域を再確認する。細かい点に立ち入れば、七山巡り、七パダ海、七体の藁人形といった聖数が各所で使われて、暮らしを営む生活空間が聖化される。ジェ、クッ、ノリによる自然への働きかけによって人間と神霊との関係が新たに結び直されて再構築される。

祭りの基調は豊漁や健康の祈願で、邪悪なものを追い出して、生活の安泰を願うことであるが、海を生業の基盤に置く漁民としての意識の特徴は、水死者の祟りを畏れることであろう。海での生活は常に危険を孕み、村人の誰もが親族や縁者に関わる水死者との関係があり、生前の記憶や水中の祖先との繋がりを断ち切ることはできない。水死という異常な出来事は、凶事や不漁の原因として潜在的な意識に働きかける。死霊を忌避する一方で鎮魂する。そして、死者の声に耳を傾けて、死者と生者の双方が交錯する巫女の語りの中で身近な死者として感じ取り、生活の秩序を揺るがすことによって更新していく。漁民の村は、死者が生者の世界に深く入り込んでいたのである。村は死者の記憶と共に生きてきたのであり、年一回の龍王祭でのクッで死者の霊を呼び出し、その語りに耳を傾けることにこの祭りの大きな目的があった。

村の日常的な光景として前面に広がる海は、村人の生活の糧である豊富な海産物を齎す富の源泉であり、生業を営む大事な生活空間であるが、海は穏やかに見えても短時間に変貌する危険性に満ち、底知れない恐ろしさを秘める。気候変動に左右され、潮流は絶え間なく変化する海は、しばしば人間の予測を超える事態を生み出し、神秘的な現象を生ずることもある。人間の力ではどうすることも出来ない自然とうまくやっていく知恵を呼び覚ますのが正月の祭りなのであろう。

９、祭りの変化と考察

自然と共に生き、海を生業の糧として生活してきた村人が長い間かけて構築したコスモロジー (cosmology) は、不変のものではなく、常に外部からの働きかけによって変動してきた。特に、近代という時代は 1910 年以後の日本による植民地化や国民総動員による総力戦の戦争が続き、1945 年の終戦以後も終わらず、朝鮮戦争（1950-1953）によって国土と民心は荒廃した。更には経済発展や行政改革が変化を促進した。1970 年に始まったセマウル運動は民間信仰や生活慣習を破壊し、伝統の連続性に大きな亀裂を生じさせた。その後、祭りは復活を遂げるものの、1985 年２月１日付けの無形文化財指定の影響は甚大であり、観光化も進んだ。毎年の祭りでは沢山のアマチュア・カメラマンが押し寄せて祭場で傍若無人に振る舞い、喧嘩騒ぎを引き起こすこともある［宇田川 2007：145-148］。2012 年の祭りでは、当日は風が強くて、半島側の格浦（ギョッポ）から蝟島に渡る朝の連絡船が欠航し、200 名が格浦港に取り残されて、沢山の帰省客が祭りに合わせて帰ってくることが出来なくなっただけでなく､多くのカメラマンを含む観光客も足止めをくった。その結果、島民を主体とした祭りになって雰囲気は保たれたかのように見える。毎年の祭りの雰囲気は、当日の連絡船の状況によって大きく変わる。こうした事態に至った経緯については、聞き書きと文献からある程度は明らかになる。その変化は以下のようである。

①　全国民俗芸術競演大会への参加と知名度の上昇

第一の大きな変化は 1978 年に起こった。同年 10 月 19 日から開催された第 19 回全国民俗芸術競演大会に、蝟島の人々は、ウォンダンジェ（願堂祭）と呼ばれていた祭りの一部を脚色してウィド・ティベノリ（蝟島茅船遊び）という名称にして全羅北道を代表して出演し、最高位である大統領賞を受賞した（10 月 21 日）。大会への出場は、ある民俗学者の推薦によるもので、村人と相談して芸能的な「民俗ノリ」の部門に登録することにしたのだという。大会の種目は農楽・民俗劇・民俗ノリ・民謡に分かれていたので、ティベノリに特化させて、芸能として再構成した［宇田川 2011：12］。恐らく全羅北道や全羅南道の西海岸に多い船送りの中でもしっかりした構成であることを強調して賞を狙ったものと思われる。この「舞台芸能化」による＜文化の価値付け＞は見事に成功し、ティベノリは知名度を高めて、地元でも観客を意識して「見せる」祭りにするという演出が加わるようになった。現在の行事の主要部分がこの時に再構成されたのだという。「蝟島ティベノリ保存会」が、1980 年４月７日に発足して５月 16 日付けで社会団体となり、1986 年 11 月１日に無形文化財の保存会として認定され、外部との連絡機関となった（会員は全て男性）。1984 年には、大里願堂祭の報告書［河孝吉 1984］が出版されて、情報の資源として活用されることになった。

資源化の影響は随所に現れた。祭りの開始時間は、本来は明け方からであったが、対岸の格浦を午前８時に出発する連絡船でやってくる帰省客や観光客の到着時間に合わせて、午前８時から９時の間に設定されるようになった。しかし、元々は出発は東の堂山の前に集まって、８時から風物を奏でて山に登ったという。現在では、無形文化財保護のために作られた「伝授館」に当日の８時 40 分頃に集合して、準備を整えてから出発する。あくまでも無形文化財としての意識が濃厚であるが、「伝授館」の周囲にも不浄よけの「禁縄」を張るといい、土地の文化に飲み込まれて「再文脈化」された様相もある。これは外部か

らの視点で文化が価値付けされ、評価の対象となることで、地元の意識を変えていくことになった典型的な事例であると言える。

② 無形文化財の指定と文化の流用

第二の大きな変化は、1985年2月1日付けで国定重要無形文化財82-3号に指定されたことである[11]。その時の指定名称は、蝟島ティベノリ（茅船遊び）であった。元々蝟島の祭りの目的は豊漁祭であり、マウルクッ（村の巫儀）の性格を強く持っていて、地元ではウォンダンジェ（願堂祭）と呼んでいた。しかし、呉秀卿の指摘［呉2008：62］では、全体の構成は、「堂祭」「撓主山」「跳龍王」「茅草船祭」であったが、「跳龍王」、つまり「龍王祭」の一部であった「茅草船祭」、即ちティベノリ（茅船遊び）が独自性を持つ特色ある行事として研究者から注目され、指定にあたっては総称として用いられたのである。重要無形文化財に指定されていく過程で、行事に大きな変化が発生した。それは、水死者への祭祀を主体としていた「龍王祭（ヨンワン）」（ユワン祭を含む）の大半が失われ、2時間のクッが20分になってしまったことである[12]。当地の人々は、水死者の霊魂は、家に戻って祭祀を受けたり食事をもらったりすることが出来ないので、各家は飯や料理をお盆に載せて港に持ってきて供養を巫女に依頼した。巫女は各家ごとに招魂して祀り、死者の託宣をした。現在では、この重要な部分は完全に省略され淘汰された。島の人々は、その原因を動力船が増えて水死者が減ったからだという。しかし、大きな要因は、無形文化財の指定を受けて以後、よその地区から大勢の観光客がやってくるようになり、このように長くて個人に属する儀礼は、外部から来るものに対して「見せる」ことは好ましくないと考えたことである。また、祭りの開始ももっと早く（船の朝一便を待つようなことはなく）に始まっていて、山上での堂祭（願堂祭）は現在よりもはるかに長く、港での龍王祭への女性の参加者ももっと多かった。現在は、水死者の供養は他の日を選んで行う。そして、龍王祭に参加する女性も段々と少なくなってきた。儀礼の中核は放棄され、名称も全体の一部の儀礼である「ティベノリ」と呼ばれ[13]、茅船を曳航して流す時には、観光客用に別の船を用意して、沖合までの伴航を行うようになった。沖合を漂うティベは写真にとられ、観光客向けの旅行ガイドやパンフレットで紹介され、インターネットで流通する。そして、儀礼や社会の文脈から政治や環境の文脈にも転換されるようになった。2003年7月14日に蝟島への核廃棄物処理場誘致計画が発表され、この小さな島は話題の焦点となったが、同年12月31日に邊山半島で開催された誘致反対運動の「核なき世界のための年越しマダン」のパンフレットでは、ティベの先端に反核を示す黄色い旗がつけられ、その下には藁人形と反核運動のデモ行進の写真が並んで呈示されていた［宇田川2011：6］。誘致計画は、2004年2月14日の住民投票での91.83％の反対（投票率72.01％）という結果を受けて、12月1日に中止となった。ティベは元の文脈を離れて、「記号」（sign）として多義的な意味を施され、社会運動の象徴として使用されるまでになった。現在の状況は、儀礼が「文化」として強く意識されるだけでなく、流用（appropriation）されて想像力を喚起する媒体になっているのである。

③ 日程の変更と祭りの意味の変質

第三の大きな変化は1993年に生じた。同年10月10日に蝟島と半島を結ぶ船が、荒天のために沈没して293名が亡くなるという悲劇的な事件が起こった。多くの人が亡くなっ

た結果、村の人口が減少して、盛大な行事を行うことが出来なくなった。さらに、都市への出稼ぎが増えて長期にわたる祭りを支えきれなくなった。こうして、願堂祭は正月３日、綱引きとティベノリは正月 15 日となっていた祭りの日程を、全て正月３日に集中させて、人手を擁する祝祭的な綱引きを中止とするという事態に至った。綱引きは、かつては村人総出の祭りで、ファドンという童子をエヨン綱の上に乗せて行った。その後、村の周囲を綱を担いで踊りつつ巡って、円形に舞うなど祝祭風の行事で、村人の大きな楽しみ日であった。これは正月に韓国の各地で行われる祝事の地神踏み（チシンパルキ）であり、農楽のチャンゴ（杖鼓）やケンガリ（鉦）に合わせて踊って豊作と豊漁を祈り、雑鬼雑神を鎮める遊び（ノリ）にほかならない。大里マウルではエヨンノレという豊漁歌 (14) を謡いながら回る。綱引きでの雌雄の綱の合体は性交を模して、豊作と豊漁を祈願して終了し、その後にティベノリを行うという構成で、祭りは見事に完結していた。現在では十五夜の満月の日に綱引きを行うという意味は失われてしまった。ティベノリは本来、旧暦 15 日の夕方の満潮の後に生じる「強い」引きに合わせて送り出す行事であったが、現在は旧暦３日の夕方 16 時頃に行われる。これは格浦行きの船の最終便の出航時間に間に合うように祭りを終了させるためである。祭りの大幅な日程変更によって、正月の満月の日にクライマックスを迎えるという月の満ち欠けや潮の干満など自然との連動性を基盤にして展開してきた行事が意味を喪失し、全てを一日に凝縮した集約的な祭りになった。海水が干潟の上に満ちてきて満月が照らし出すという光景は人々に強い感動を与えたはずである。現在では、ティベノリという一部の要素だけが有名になって、全体の流れの意味が不明瞭になってしまった。正月３日の潮が引いた状態部分の肥大化と全体性の喪失という事態に立ち至ったのである。しかし、2012 年の祭りのパンフレットには古い日程表が記載されていた。それによると、早朝に東の堂山に集まり風物を８時頃に奏で、山登りは８時 30 分から９時 20 分、願堂祭は９時 30 分から 13 時で３時間以上、龍王祭は 14 時 30 分から 16 時 30 分で２時間となっている。ティベノリは 16 時 30 分から 17 時で夕暮れ時である。この日程表は、現在の合理化され外部に見せる祭りとなる直前の段階で固定した版で、現在は更に日程の短縮が進んだことになる。これ以上の省略は許されないギリギリまで合理化された祭りになったと言える。

④　巫女の衰退と今後の展望

祭りの中核にあった巫女によるクッも大きく変化した。大きな流れは島出身の世襲巫のタンゴルから、半島出身の降神巫のムーダンへの変化である。最後の世襲巫はチョ・グムネ（조금례。曺金禮。1917 ～ 1995）で鎮里マウルに居住し (15)、タンゴル・パン（信者組織）が形成されていて、祭りごとに呼ばれてクッを行っていた。その後、弟子のアン・ギルリョ（안길녀。大里マウル居住）が 1998 年まで継続したが、1999 年に亡くなり、これ以後は島外のムーダンに依頼することになった。2006 年と 2007 年は、全北大学校の教授のすすめで半島から世襲巫のチョン・グムスン（전금순。1927 年生）が呼ばれて、クッを務めた。その後、ユ・ジョムジャ（유점자。新安の世襲巫）がしばらく担当した。今回のムーダンはヤン・オクキ（양옥기。梁王基。1948 年生。降神巫でコムソ在住。グアンのオクソ出身）で、2003 年から 2005 年までクッを行ったが、その後は声がかからず、2012 年には久しぶりに招かれたという。こうした不安定さは島民の微妙に揺れ動く意識を反映している。か

つての龍王祭やユワン祭では、世襲ムーダンによるクッで死者と懇切丁寧な対話が行われ、細かな人間関係の機微に触れるような神霊の託宣や指示を受けることが重要であった。個別の事情に対応していたので時間もたっぷり必要であった。しかし、島外の降神巫のクッになると、蝟島とは言葉が微妙に違っていて島民の心情を理解できないので、十分な満足が得られなくなり、巫女が頻繁に変わるという不安定要因を増大させたと思われる。島外の巫女といえども急速に数が減少し、消滅は時間の問題であり、今後のクッはさらに縮小されて、形式の保持のみの祭りになる可能性は高い。

こうした変化は、1985年の無形文化財指定以後に加速度的に進行した外部からの働きかけによって引き起こされた。伝承を受け継ぐという意図で伝授館が1991年10月4日から建造に着手して1992年9月18日に完工した。展示館の建造は1994年8月2日に始まって12月29日に完成し、1995年7月1日に茅船を展示した。更に2003年4月17日に展示館の新たな整備が完了して内部展示が整えられた。こうした動きは、島民の間に無形文化財の意識を定着させ、見せる態度を徐々に強めていく効果をもたらした。2008年には伝授館の上部に多目的伝授館が新築されて、会合に便宜が図られるようになり、村の社会的絆を強める世俗的な役割を強めている。

現在の巫女がクッに着用する「巫服」は、文化財庁から支給されたもので、指定以前はチマチョゴリ（韓服）でクッを行っていた［河孝吉 1984：18］。文化財指定以後は、見栄えの良い伝統文化に創り直され、韓国の国民文化としてのクッの標準に合わせられたのである。伝統文化は創り出されると言える。2007年には写真入りの祭りの報告書［김익두、글 2007］が新たに出版されて、標準テクストとして流布されるようになった。こうした事業のために、「蝟島ティベノリ保存会」へ扶安郡から15000万ウオンが委託されたと聞いている。現金の投入による恒久的施設の建設は、保存会に対しての有効な働きかけであったが、今後の継承は危うい。

⑤　国家による祭りの管理からグローバル化へ

蝟島の正月の祭りの今後の展望については、無形文化財の祭りとしての性格が強まり、「国民文化」の中に組み込まれ、観光化もさらに進む可能性がある。蝟島は「文化観光示範地域」に指定されている。国家による祭りの管理と統制もさらに強化される可能性がある。大里の村内の道沿いの壁には正月の祭りの様相が描かれていて、村がこの祭りのために生きているような雰囲気が醸し出されている。一方、蝟島にはキリスト教徒も多数いて、祭りの時は亭子で外来客の接待にあたっていたが、クッは迷信と考えて見ようとはしない。島の中も決して一枚岩ではないのである。他方で、グローバル化（globalization）も確実に浸透してきており、ユネスコの働きかけが大きく影響している。ユネスコは、2001年に「人類の口承及び無形遺産に関する傑作の宣言（傑作宣言）」によって無形文化遺産の登録に乗り出し、2005年までに90件を認定した[16]。2003年10月のユネスコ総会で「無形文化遺産の保護に関する条約」（無形文化遺産保護条約）が採択され、2006年4月に発効し、傑作90件は本条約の代表一覧表に統合された。2009年以後は各国からの申告に基づいて多くのものが、無形文化遺産に登録されている。蝟島ティベノリも国の無形文化財である以上は登録の可能性は残る。このように世界の水準に照らしてブランド化された祭祀芸能は、更なる変化を遂げていくことが予想される。蝟島の村祭り（マウルクッ）は、

緊密に構成されたコスモロジーを維持してきたが、「文化財」や「遺産」など外部からの概念で評価し直されたことによって、伝統と現代が切り結ぶ文化の闘争場（arena）として、現代の状況を鮮明に映し出す鏡になってきた。

極めて地方的なものが、行政や国家、国際社会の働きかけによって、一挙に世界各地の類似性を持つものと比較の俎上に載せられる事例が現代では増加している。各地のローカリティ（locality）がグローバル化と接合する様々な場面を検討することで、現代世界における「文化」概念を真の意味で相対化する可能性が生まれるのである。

注

（1）行政上の表記は、全羅北道扶安郡蝟島面蝟島大里である。なお、蝟とはハリネズミの意味で、島の形状の比喩に由来する。

（2）今回の蝟島での調査にあたっては、金容儀氏、李京燁氏をはじめとする韓国の研究者に多くのご教示を得た。本稿も韓国の研究者による多くの先行研究に多大な学恩を得ている。

（3）マヌラはソナンに含まれ、マウルの守護神とされる。

（4）西海岸の堂祭や送船の儀礼の比較については、［李京燁 2012］に詳しい。

（5）村の東は磁石の絶対方位の東北であり、実際には 30 度から 45 度ずれた民俗方位である。

（6）茅（ティ）については、近い音の「ティウダ」（送る）の連想もあるらしい。

（7）南へ送るという意識がある。絶対方位で言えば、南東に近い。

（8）藁人形は五体が通常で、東西南北中の五方、五行に見立てるという説もある。

（9）黒山群島では龍王の神体と見なす［李京燁 2012：99］。

(10) かつては墓が海側に面してあり、その理由は祖先が豊漁を見守る意識があるためで、風水の「明堂」に見立てるという［宇田川 2011：16］。海岸一周道路の建設で移築された。

(11) 韓国は 1962 年に文化財保護法を制定し、1964 年から重要無形文化財の選定を開始した。無形（intangible）の概念は、日本の文化財行政の影響を受けている。内容は、技能（工芸･飲食）、芸能（音楽・舞踊・演劇・遊戯と儀礼・武芸）である。蝟島での無形文化財になる過程や国民文化としての位置付けに関しては［宇田川 2007］を参照のこと。

(12) 呉秀卿は、「中心的な儀礼を放棄してしまった不完全な伝統芸能となった」［呉 2008：62 - 63］と指摘する。

(13) ティベは当日に造るが、以前は 3 日前に用意した。現在は人手が足りないので帰省者の手伝いが必要だという。

(14) この歌詞は、魚が来た、魚を捕まえろなど、豊漁祈願の内容である。

(15) 1985 年 2 月 1 日に技能保持者として指定された。

(16) 韓国の場合、2001 年は宗廟祭礼音楽（朝鮮王朝以降）、2003 年はパンソリ（語り物）、2005 年は江陵端午祭であった。

参考文献

李　京燁 2012「韓国西海岸における送船の類型とその意味化の過程」『“カラダ” が語る人類文化―形質から文化まで―』（国際シンポジウム報告書Ⅲ）国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所、91-101 頁。

呉　秀卿 2008「韓国の伝統芸能の伝承及び原形の問題」『わざ・技の文化資源化―危機に瀕する民俗文化の保存継承―』（日・中・韓民俗文化遺産円卓会議）神奈川大学廣田研究室、65-76 頁。

宇田川飛鳥 2007「『重要無形文化財』と民俗事象の『国民文化』化―蝟島ティベノリを事例として―」『人間と社会の探求　慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』65 号、134-151 頁。

宇田川飛鳥 2011「民俗社会における空間分類と自然観―韓国西海岸蝟島ティベノリの場合―」『比較民俗研究』26 号、比較民俗研究会、5 -30 頁。

河　孝吉（하효길）1984『蝟島의民俗―大里願堂祭篇―』（대리원당제편）民俗博物館叢書 2、國立民俗博物館（서울、ソウル）。

김익두、글、2007. 위도띠뱃놀이、국립문화재연구소기획；김상수사진（중요무형문화재、제 82- 다호）국립문화재연구소.